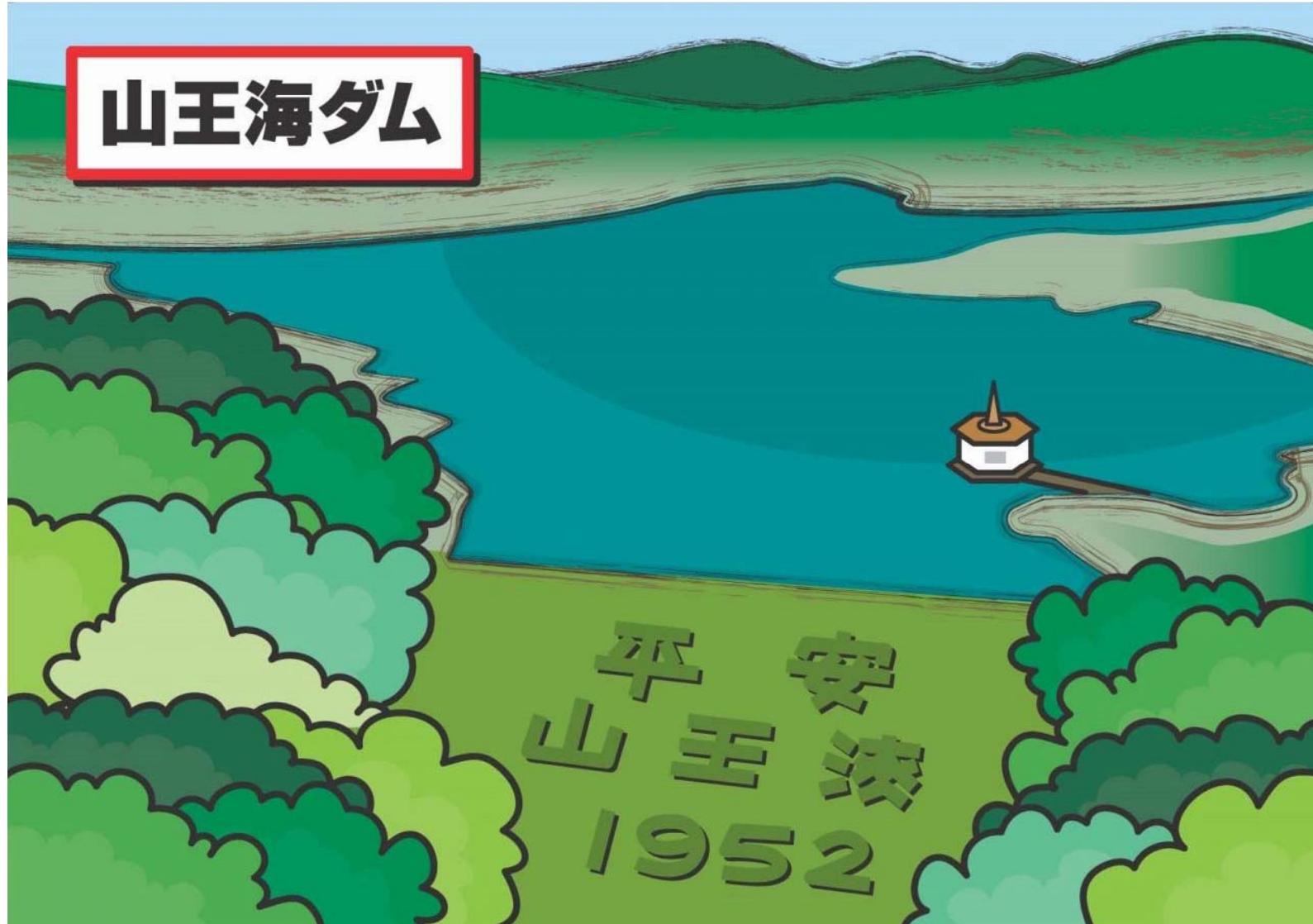


## 耳かけ稲荷と水げんか



【ナレーション】  
この作品は、昭和53年に紫波町立水分小学校の、「母と子の公民館活動」の学習の発展として当時の先生や児童と、その母親によって作られた絵本をもとに、紙芝居にしたものです。

## 耳かけ稲荷と水げんか



【ナレーション】

紫波町・矢巾町・花巻市石鳥谷町にまたがる山王海地域は、古くから米づくりに良い場所として、開拓がすすめられてきました。

今では立派な山王海ダムが、この地域の田んぼや畑を広く潤し、私たちの生活を支えています。この山王海ダムが出来上がるまでには、大変な苦勞がいっぱいあったそうです。

このお話は、そんな大変な苦勞の末に、村の水がめとして作られた、山王海ダムが出来るまでの物語です。

## 耳かけ稲荷と水げんか



【ナレーション】

山王海ダムのふもと、滝名川沿いに、志和稲荷神社があります。

その神社にいるお稲荷さんの耳が、かけているのはなぜだか、みなさん知っていますか？

今からおよそ3百70年前の江戸時代から、この志和稲荷神社の前で始まった「水げんか」という、田畑に引く川の水を奪い合う農民たちのけんかが原因だと言われているのですが、その水げんかは、なんと3百年間も続き、わかっているだけでも36回もあったと言われています。

## 耳かけ稲荷と水げんか



【ナレーション】

大正13年頃から、山王海から山のあいだを流れて、くる滝名川は、志和稲荷神社の前で2つの川にわかれていました。

ひとつは志和方面に流れていく滝名川と、もうひとつは水分方面に流れていく高水寺せきです。

田んぼはどんどん広がってゆくのに、これっぽちの水では足るはずがありません。

【村人A】

「天の神様、どうか一日も早く雨をめぐんでくなんせが。」

【村人B】

「一粒の雨でえーがら、何とか降らせでくなんせー。

雨降らねど、おらだちの命があぶながんす。」

【ナレーション】

どの家でも、どの家でも、地べたに座って祈り続けました。

しかし、さらにひどい日照りが続くと、村人たちの天への祈りも届かず、地面はカラカラに乾き、せっかく育つた稲は、次々に枯れていきました。

## 耳かけ稲荷と水げんか



【村人A】  
「水がなければ、食うものもなくなって、死んでしまうぞ！」

【村人B】  
「水っこ全部よこせ！」

【ナレーション】  
大正13年の夏、志和稲荷神社をはさんで、滝名川勢と高水寺勢の水げんかが、とうとう始まりました。  
合わせて6千人が、力で水を奪いとろうとしたのです。

【村人A】  
「それっ、どがどが石投げろー！」

【ナレーション】  
ビュツ！ビュツ！ガツン！ガチーン！

【村人B】  
「うわあっ、いでえー」

【村人A】  
「負けるな！水っこ取るまでけっばれ！」

【村人B】  
「ひいーっ、誰があっ！」

【ナレーション】  
バチッバチッ！ドスン！ガラガラガターン！  
目の前に、そして体に、大石小石とがった石が、雨のようにビュンビュンとんできます。  
そして、あっちからもこっちからも、村人のうめき声が聞こえてきます。  
志和の稲荷神社を守る、大切な稲荷さまの耳がかけてしまったのも、この時だといわれています。

## 耳かけ稲荷と水げんか



【村人A】  
「あああ、助けてけろーっ！」

【村人B】  
「がんばれ！川の水はおうたちのもんだ！」

【ナレーション】  
けがをして、たくさんの村人が倒れていきます。  
悲しいことに、亡くなった人もいました。  
その時です。滝名川勢の2人の使いが息をきらして、高水寺勢に走りこんできました。

【村人A】  
「おうほは、山の上さ鉄砲を据えつけた。  
早く手を引かめとバラバラと打ち殺すぞ。」

【村人B】  
「何をめかすか！」

【ナレーション】  
ドーン！タタタタタ…ドドーン！

【村人B】  
「ええい、鉄砲ぐれーで負けるものか！  
それ、もっと石を集めろー！」

【ナレーション】  
村人は怒り狂い、水げんかはますます激しくなり、やむ気配はありません。  
それくらい、どこの集落でも必死だったのです。

## 耳かけ稲荷と水げんか



【和尚】  
「水が欲しい…だども、このままけんかをしてでも、みんなダメになってしまうべ。」

【村人C】  
「なにか良い方法はねーべが。」

【村人B】  
「そうだ！ため池をついたらどーだべ。」

【村人A】  
「ため池に溜める水がなかったら、どうするんだ？  
それよりは、山の奥さダムをついたらよかんべ？」

【村人B】  
「んだな、その方が心配なかんべ！」

## 耳かけ稲荷と水げんか



【ナレーション】  
そこで藤尾村長は、ダムをつかって欲しいと、国へ申し入れることになりました。

そして、山王海集落の家々を何度もたずねて、

【藤尾村長】  
「みんな、たのむ。ダム建設に何とか協力してけねが？」

【ナレーション】  
こういって、昼も夜も一生懸命、協力をお願いして歩きまわりました。

しかし、ダムが出来れば、山王海集落は水の底に沈み、村人はよそへ移らなければなりません。

そのため、どんなに藤尾村長がお願いをしても、村の人びとはガンとして言うことを聞かなかったのです。

【村人B】  
「新しい土地で田んぼをつくるには、百年もかかるんべ！  
やんだやんだ！家を動かす銭はどうしてくれるんだ！」

## 耳かけ稲荷と水げんか



【ナレーション】

話し合いは長い間続きました。

そして、疲れがたまった藤尾村長は、とうとうバツリと倒れてしまったのです。

【藤尾村長】

「なんとか…たのみをきいて…けろ。」

【ナレーション】

ぼたっ

こう言ったまま、藤尾村長は起き上がらなくなってしまったのです。

村びとはしーんとして、不満でいっぱいな気持ちをじっとおさえました。

そして、必死な藤尾村長の姿に、村人はみなじっと考え込みました。

## 耳かけ稲荷と水げんか



【ナレーション】

そうしているときに、ついに国から、ダムが建設されるという知らせがはいりました。

このことによって3百年以上も続いた水げんかは、これで終わることになりました。

ところが、ダムがつくられるために、村の人びとは村を去らなければなりません。

【村人A】

「さびしいことだな…

でも村のためだから、しかたねーべな。」

【村人B】

「んだな、みんなでいっぺー水が使えるようになるんだからなあ。」

【村人A】

「あそこに見える田んぼも家も、みーんなダムの底に沈んでしまうんだべな。」

【ナレーション】

山王海を去る人々は、こう言いながら新しく住む南山王に向かいます。

【村人B】

「おら家の田んぼも、これで見おさめだなあ。」

【村人A】

「お墓を水の底さ沈めたらば、バ千が当たらねーべが。」

【ナレーション】

村びとは、たくさんのさびしさを持ちながら、荷車をゆっくり押しながら、ふるさを何度も何度もふり返りました。

## 耳かけ稲荷と水げんか



【ナレーション】

そして7年後、ついに当時としては東洋一のアースダム「山王海ダム」が完成したのです。

ダムには記念のしるしに「平安」という文字のカタチに、つつじが植えられました。

この「平安」という文字には、3百年以上も水げんかをしてきた祖先の苦勞をなくさめ、今までの水争いの悲しい出来事を忘れず、これからはお互いに

心をつなげて、暮らしていこうという願いがこめられているのです。

そして、当日には、

【みんな】

♪ 月がでたでた 月もでた (ヨイヨイ)

国見新山(にいやま)の上にてた

あんまりみごとな山王海

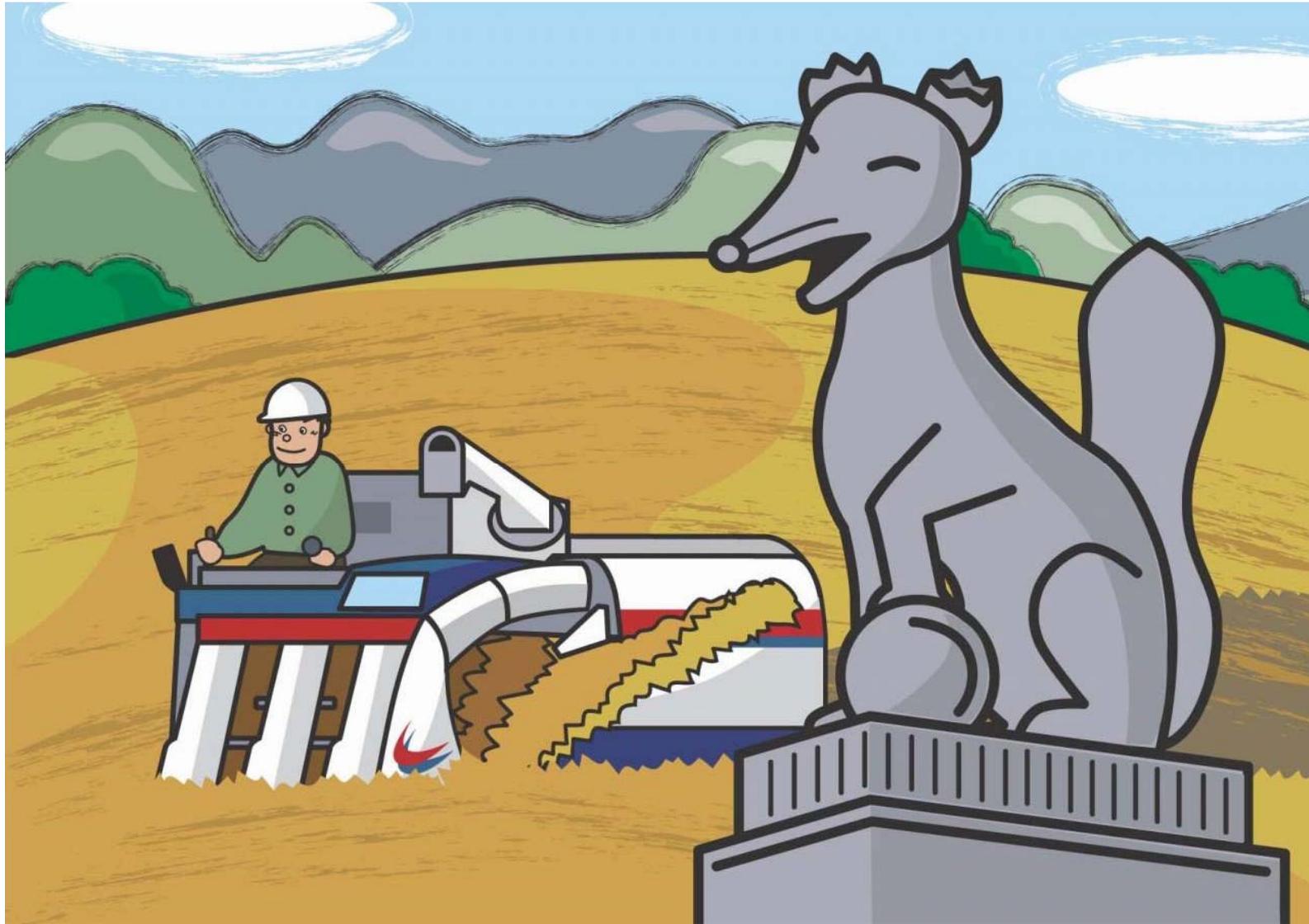
月(つう)も(き)みとれてほほえんだ (サ/ヨイヨイ)

(※炭鉱節)

【ナレーション】

と、村人は仲なおいのしるしとして作られた「仙人踊り」を、さかんに踊って祝いました。

## 耳かけ稲荷と水げんか



【ナレーション】

山王海ダムが出来てからは、村のまわりには豊かな水が流れて、たくさんのお米を作れるようになりました。

山王海ダムは、2001年にさらに大きく作らせた「新山王海ダム」として、大きな恵みを私達の暮らしに与えています。

そして、今でも志和稲荷神社のお稲荷さんは、耳がかけた姿のままで、当時の人々が命をかけて水を求めた様子を、今に伝えているのです。

【稲荷】

「たくさんのお苦勞と努力を、みなさんも忘れないでね。」

【ナレーション】

と、言っているように。

おしまい